

ボッチャ街ににぎわい

東北大や仙台市が連携し、パラリンピック種目「ボッチャ」の体験を通じた街中のにぎわいづくりに乗り出した。青葉区中心部のイベントにコートを設け、誰でもプレーできる競技の魅力と、障害者と健常者の距離を縮める「心のバリアフリー」の重要性をPRする。

東北大や仙台市体験会

市が市役所本庁舎前の市道表小路線を通行止めにした3日の社会実験で、イベント空間となった車道でボッチャ体験会があり、臨時に設営された屋外用コートは家族連れでにぎわった。宮城野区の大学教員津村耕司さん(40)は「初めて体験した。気軽にできるのでまた挑戦したい」と話した。

ボッチャ体験とまちづくりに着目した試みは、東北大が市障害者スポーツ協会、市スポーツ振興事業団などと7月に設立した「ボッチャフェスティバル仙台実行委員会」の呼びかけに、市が協力する形で実現した。

体験会は9月23〜25日、JR仙台駅西口の青葉通を車線規制した市の社会実験の芝生広場で初めて開催。10月2日には、勾当台公園であった市など主催の福祉まつりで実施した。今月3日を加えた5日間、車いす利用者を含めて計1106人がボッチャに親しんだ。

「心のバリアフリー」推進



通行止めにした市道であったボッチャ体験会
=3日、仙台市青葉区

実行委は参加者にアンケートを実施。集計結果を踏まえ、今後の展開を市に提言することも検討している。事務局長を務める東北大公共政策大学院の御手洗潤教授は「ボッチャは親しみやすく、健常者が障害者と触れ合う入り口として適している。障害者が街に出かけるきっかけにもなる」と意義を強調する。

市は、都心部の活性化や障害者福祉、新本庁舎建て替えを担う各部署が携わった。本庁舎整備室の担当者は「障害の有無や年代を問わず楽しめると感じた。ボッチャを生かした、さらなるにぎわい創出の可能性を探りたい」と説明する。